

---

# マレピトの楽園

山下しんか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マレビトの楽園

### 【著者名】

山下しんか

### 【あらすじ】

ふと気がつくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、「よく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。

天をあおぎ見ればうららかな日差し。

目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。

そして、デカい氷に包まれている自分。

凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。

秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に田の前の一人の元で働く事となるのだが……。

短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し訳ありません。

## 序章 狐男と妖精女

？？そ、貴方あなたは言靈ことだま使いなのですか？？

？？ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは？？

？？なら、いつそこからいらっしゃいませんか？ 良いといふですよ、こちらは？？

？？分からぬ？ そ、貴方には分からぬかも知れませんね？？

？？でも大丈夫だいじょうぶ。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導いて差し上げますから？？

？？私？ 私の名は？？

気がつくと、幸田めいじ（こいだ）一命司は瓦礫がれきに埋もれるようにして、椅子に座っていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして、その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはついさつき出逢つたばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅しんくの髪の妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾しつぽまで生やした姉似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊かたまりの中から顔だけ出している

という異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽ひの光の下で見えてみると、一人??姉かと思つてしまつた者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思えた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、おもか面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣みたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人??女の子、と思った人物も、尖った耳が時折動くし、チャイナドレス??というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体躯を包んでいる。どれを取つても目を引くが、その小さな背丈に比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

(ロリ巨乳……)

思わず、そんな四文字が命司の脳裏掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのようないきなり視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似のキツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からぬ言語で。

だが、言葉は分からぬものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかつた。つまり、少なくともその方々から男寄りの存在だらうと思つ。とはいへ、まだ明確には分からぬが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒があかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。  
「いや、分かんないつて。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだつたら、マジで許さないからな?」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているどうしようもない姉でも、多分ここまで凝つたイタズラはしないハズだ。そうは思つても、命司はあの姉に関しては、いつでも『万が一』を考へてしまつ。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したもの

が、一本の細く尖った氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のよう

に持つて、命司の顔に近づけてくる。

「お、おい、何する気だよ？」

ゆつくりゆつくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるか分からぬ恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。

が、それも？？

「うわあ！ やめろおー！」

命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体躯からは想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむつた。すると、

（なんか……書いてる？）

ひんやりとした、細く固い感触が瞼の上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞつていぐ。それから耳が終わると、今度は唇から頸（あご）（あご）、一喉にかけてなぞつていった。

そして？？

「おい、聞こえどるか？ 言葉分かんねやつたら、眼え開けてみい」  
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。

（か、関西弁？）

命司はゆつくりと瞼を開いていく。

「やつた！ さつすがマイスター！ だい成功～！」

右手すぐ傍から、今度は女の子が理解出来る言葉を紡いだ。

「ねえねえ、キミ、どこから来たの？」

女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖った耳の先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。

だが、

「しゃしゃり出てくんない、この口リジガ」

不意にキツネ顔はそう言つと、女の子を一睨みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。

「口リジやないよお。マイスター、あたしが二十三だつて知つてるじやん」

「そのナリで言つても説得力皆無やろが。とにかく黙つとれ。やつと話通じるようになつたんや、脱線さすな」

どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に、今にも掴みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もつとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。

「まあええ、取り敢えず名前からや。俺はコート。コート・コーゼン。で、こいつの口リガキは、サラ・アフメドや。お前は？」  
不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気を滲ませて、その狐男？  
? コートはそう訊いてきた。

「違うから！ 口リジやないから！ 結婚できる歳だからねあたしは！」

口リガキ？ もとい、サラが横から口を挟む。が、再度コートに睨まれて口をつぐんだ。

「えへ……命司……幸田……命司つす……」

取り敢えず、氷漬けになつて身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思った。

「エーメイジ・コーダ・メイジッス、か。アホっぽい名前やな」

言つて、コートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものかが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字

？？歴史や国語で習つた『甲骨文』とかいうものに近い。

とまあ、それはひとまず置いておくとして、命司は取り敢え

ず誤りを正さなくてはならない。

「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル？」

命司がそう告げる。命司は額を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧されてしまう。

刹那、

「ぐあつ！」

コートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。「ああ。今マイスター機嫌悪いからさ、ハキハキ答えた方がいいよ？」

さんざんコートに罵倒され、反論する度に睨まれたせいか、サラ（一三）までもが冷めた視線を送つてくる。

そして、投げて刺さったペンはそのままに、コートは新しいペンでさつきのメモを修正していた。

「……で、メイジ・コーダ君よ。お前、どうから来たん？ つたく、

人様の高価な機材破壊しよつて。ぐだらん答えやつたら、そのままダ＝インのカルデラ湖に浮かべたるからな？」

「沈める、じゃないの？ マイスター」

「氷は浮くやろ。まあ見ててみい。ひっくり返つて、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」

「やあん、コワイ！ マイスターったら鬼畜ねー！」

虜囚そつちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだと命司は思った。

「えーと、俺はデスね……」

ここはもう、洗いざらい話すしかない。せつかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

それは、いつの記憶だろうか。

命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。

人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。

淨衣に身を包んだその姿。祖父は田舎の神社の神主だった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ??

「そうかそうか、イジメられたか。まあ、そんなに気にするな。人はな? 自分の下に誰かがないと気が済まんのよ」

蝉(せみ)一時雨の中で、泣きじゃくる命司を膝に抱き、本殿の階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫でながらそう言つた。

「そんなのヤだよ! ボク、悪い事してないもん! デザしてボクがイジメられるの?」

人生とこう名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽。それを承服できる術も、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。

「それに耐えられんのだったら、じゃあ、お前が強くなるしかないなあ……幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父ちゃんが教えてやろうか?」

「…………ちか…………ら?」

泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。

「古来、日本には言葉に魂が宿ると信じられてきた。それを『言霊』という。祖父ちゃんはな、その使い手なんだぞ?」

何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分からない。でも、それがあるなら。それができるのなら、大好きな、祖父のようになに??

「そうしたら……こじめられない?」

「それは、お前が正しく使えたら、な……祖父ちゃんの言ひ方と  
守れるか？」

「うん！」

命司が力強く頷くと、祖父は愉快げに、そして嬉しそうに笑った。

意識が、浮上していく。

懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、

「じい……ちゃん……」

現実が、ふいに命司を包んだ。

(どこだ、ここ……?)

ぼやけた視界がハツキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのが。

体育座りで手足の伸ばせない狭さの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。そして、その先に見えたもの？？いや、見えた『者』は？？

(やっぱりか)

そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中に堂々と立つのは、誰あろう命司の姉の安和だ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立されている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指の量子物理学博士。それが命司の姉だ。

性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりの女。

実家の借金苦を物ともせずに、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金で大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だが？？

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。  
相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。  
「テんメエ～つ！ また拉致りやがってゴルアアアア！ 僕を何回  
テーマの実験材料にすりや気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。  
安和の研究は『量子テレポート』。昔のハリウッド映画で、『ハ  
トと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司  
はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、

身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかり  
だ。

「素直じゃないなあ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪（あんな）（ゆが）め、一安和は右手人差し指を立てて、左右に  
振つてみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者（ひけんしゃ）にキミは選ばれ  
たんだヨ？ この超天才量子物理学博士・幸田安和様（さちた こうわ ようじやう）のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとう  
キレた。

「コーダアンナサマノネ！ ……じゃねえこのマッジサイエンティ  
ストが！ いいか？ 僕はこれからバイトなんだよ！ わつわと解  
放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せっかく、何の取り柄もない平凡  
な専門学校生のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげ  
てるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女（たおやめ）っぽく身体をくねらせ、わざとじりじり涙を見せる安和。そ  
の態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟だという事が、  
命司は一番許せない。

「ああ！ ああ！ 確実に名前残るだろうよー。量子テレポートだから、世界初の事故の犠牲者だつて事でな！ つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！ マジで俺は忙しいんだよ！ つたく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗にフェードアウトしやがつたクセに！」

嫌味、懇願、ついでに恨みの文句を並べ立て、命司は狭い窓にべつたりと頬を押し付けて姉を睨んだ。

「身内だからいいんじゃない。他人だつたら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？ それに、親の借金で子供が苦しむのは理不尽だわ」

しらつと涼しい貌<sup>かお</sup>で、安和は微笑んで見せる。  
知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。

「身内の方が問題あるよボケえ！ つか、マジやめろよー。マジでバイトあんだつて！」

猛<sup>たけ</sup>り狂う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬<sup>あせん</sup>唖然とさせた。「ああ、今日行けないつて連絡しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？ その歳でステに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思つたんじやない」

唖然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗き窓をステキな赤色に染めていく。

(こんのアマああああ……！)

社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期に及んで、実の姉から浴びせられるとは。

「大きなお世話だこのヤロウ！ まだ負け組だつて決まってねえだろが！ つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええつ？ 勝ち組様よー！」

そう吠えつつも、しかし命司は姉の立ち位置??その一点だけは

分からぬ訳でもなかつた。元々、宗教にハマつた叔母の保証人になつた、お人好しの親父が悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国にでかせ出稼ぎ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。  
命司の剣幕に、安和は苦笑を浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑へと変わる。

「やれやれ……つたく、だからアンタは負け組脳だつてのよ。いい？　この実験が成功したら、どんだけの金が入つてくるか分かつてる？　ハツキリ言って、ザックザクのウツハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司はある。（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思いまスよ？　オネエママ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑（むうじや）かれた一亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知つてゐる命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいとも思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら？？

「知らねえよ！　分かりたくもねえし！　俺は学費稼ぎたいだけなんだよ！」分かつたらサッサと俺を帰せブス！」

憤懣（ふんまん）を言靈（ことだま）に乗せ、命司は放つた。

だが、命司の不用意な罵詈雜言（ばりやうごん）に、安和は刹那（せつな）不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌（かお）を見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額から頬を伝つて落ちていく。

（……そうだ、姉貴、言靈に耐性（たいせい）あつたんだつた）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言靈』の存在に気付き、命司の言葉に身構えるようになつた。つまり、最初から気構えを持つて聞けば、命司の言靈は効力を失う。その程度の能力なのだ。

そして、放つた言靈は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫<sup>さかな</sup>する結果となつた。

安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔を向けた。（ヤバイヤバイヤバイヤバイ！）

満面の笑みで、助手に何事かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まつていて。

「んじや、さつさといつちゃいましょーか」

刹那に唸<sup>うな</sup>る機械群。

「お、おい、マジやめろよ……」

不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、実弟の懇願にも姉の笑顔は崩れない。

安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子を優しくあやすかの様に。

「ダイジョーブだつて。犬とネコは戻つてきたから。……ミルクしか飲まなくなつちゃつたけど」

「ダイジョーブじゃねえよソレ！ 幼児退行してんじやねーか！」

「ダイジョーブだつて。ジユーブン微調整繰り返したんだからあ」

「ダイジョーブじゃねえよ！ 微調整でなんとかなる問題じゃねえ

からソレ！ つか、ハエとか一緒に入つてねえだらうなつ？」

「あ、さつきカマドウマみたいの入つたかも。まあ、いつか」

通称『便所コオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄<sup>せんりつ</sup>が走つた。

「どうせならバッタがいいです！ 是非バッタにチョンジして下さい！」

「さくらん、きょうらん、いや狂乱し、命司の口をついた的外れの最後の懇願？？？」

「うより、むしろ哀願も？？」

「？？姉の笑顔には届かなかつた。

「……んじや待つてるわよ？ 愛しのマイブラザー」

ウインクと共にキスを投げてくる姉。

鳴動する機械群。

やがて、命司が入つている機械の中に、淡い光が満ちてくる。  
光は粒子となり、それが、元々自身の身体を構成していたものだと悟つた時？？

「テんめええ！ 憶えてろゴルアアアアア……」

そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

(……」「……?)

気が付いた時、命司は『そこ』にいた。

そこは、広い円筒形の部屋。いや、部屋かどうかも分からない。ただ、命司の周囲には、まるでモニター画面のようなものが、無数に浮いている。それらは、特に機械のボディを持つている訳ではない。あくまで、液晶モニターから『画面』だけを抜き出したかのようのものが、厚みを感じさせずに浮いているだけだった。近くのものを観察すると、それらはまるで、ドラマの一シーンを放映しているかのように常に動いている。

**壮大な自然**、

巨大な異形の生き物、

一見すると人間に見えるが、ツノやシッポの生えた何か。

違う画面を見る度に、違った景色が見えてくる。

今の人類よりも、遙かに文明が進んでいるかのような都市が見えたかと思えば、

まるで石器時代の建物ばかりの集落が見えるものもある。

「……なんなんだ、ここ……?」

ひょっとすると、以前から念願だった、宇宙人に拉致されたという状況かも知れない。そう思つたが、自分以外に誰も見えない場所で、それを示す証拠も何もない。

命司はしかたなく、画面の一つに触れようとした。と、その時??

(そこでいいのか?)

そんな自問が湧いた。

「……つったって、他にできそつな事無いし……どうやつたら、元の場所に戻れるんだ?」

ただ独り、自答を返す。

(戻りたい？ 戻りたいのか？)

刹那の自問。気が付けば、目の前の画面には、姉・安和が慌てふためいている姿が映っていた。

「ハハ……バカだなアイツ。なに今さら慌ててんだよ……どんだけ自分の技術、過信してたんだ……？」

がっくりと頃垂れる安和の様子に、あんな姉でも心配してくれてるのか、と、そう思った時？？

安和は指を鳴らすと、助手達に指示をして室内の照明を落とし、そのまま彼らを率いて出て行つた。

「…………クククククク…………」

思わず、笑声がこぼれた。

そういうえばそうだ。躊躇なく弟で人体実験を繰り返してきた姉が、今更こんな事で、嘆き悲しむハズがない。あの去り際に見えた苦笑は間違いない。これまでがそうだったように、どこかの居酒屋で『反省会』という名目の飲み会を開くつもりなのだ。

「まあ、仕方ねえな。こつなっちまつて、今さら元の世界に未練は

ねえ」  
冷徹にそう呟くと、同時に命司の周囲に漂つていた画面が、命司の周りを高速で回転し始めた。

(じゃあ、どうする？)

再度の自問。

「そんなもん決まってる。或る意味、姉貴には感謝してるさ。これは、またとないチャンスなんだからな」  
(元の世界に未練はないのか？)

続いた自問に、刹那、様々な顔が脳裏に浮かぶ。

父と母。

友人達。

バイト仲間。

そして、大好きだつた祖父。

だが、  
それでも、  
この欲求を止められない。

物心付いた時には、既に狂っていた国。  
そこから更に、止めどなく狂っていく世界。

『力』を持つ者達の果てしない欲望の中で、  
見えない何かにがんじがらめにされている『力』無き者達。

そして、その『力』無き者の一人でしかない自分。

世界は？？少なくとも、『命司』が知っている範囲の世界』は、命司に居場所を与えてくれなかつた。

大多数の有象無象として、ある日突然消えてしまつても、誰も気にも留めない。そんな存在でしかなかつた。

「だから俺は？？俺に居場所をくれる世界に行く」

そう覚悟が決まつた刹那、

十数個の画面？？『世界』が命司の周囲に固定された。

そして、その中の一つ、真正面に在るそれに命司は手を伸ばす。

(死ぬかもしれないよ？)

「分かつてる」

(一度と戻れないかもしれないよ？)

「望むところだ」

(行つた先にも、居場所なんてないかもしれないよ？)

その自問に、指先が一瞬止まる。

だが？？

「……少なくとも、元の世界よりは希望があるさ」

再び動き出す指先。その指先が触ると、画面に波紋<sup>はもん</sup>が広がり？？

? ? ◇  
司はその中へと引き込まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4670z/>

---

マレビトの楽園

2011年12月16日17時57分発行